

巻頭  
言

## 心が渴いたとき

| 会長 山崎 學



長く生きながらえていると時々心に渴きを覚えることがある。渴きを癒す特効薬があるわけでもないし、こうしたときに準備している映画がある。

第二次世界大戦中のパリではナチス・ドイツ侵攻を目前にして、パリから汽車でマルセイユ、海を渡ってオランダ経由でフランス領のカサブランカに行き、リスボンに飛ぶ脱出経路があった。パリから逃れてきたリック（ハンフリー・ボガート）が経営する「カフェ・アメリカン」に、通行証密売人のウゲーテがドイツ人情報員を殺して奪った通行証を持って現れ、リックに預ける。しばらくして反ドイツの政治活動家ラズロが、妻イルザ（イングリッド・バーグマン）を連れてリックの店に現れ、ピアニストのサムを見た彼女は「As time goes by」をリクエストする。サムが弾きはじめるとリックが現れる。「その曲は禁止だぞ」と演奏を止めた瞬間、サムの傍らに座っているイルザに気づき、二人で過ごしたパリでの楽しい連想場面に切り替わる。パリで暮らしていたイルザは夫がドイツ軍に逮捕され処刑されたという情報を受け、失意のどん底にいたときにリックと知り合った。恋に落ちてリスボン経由でアメリカに亡命しようとパリ駅で待ち合わせるが、その直前に夫が存命と知らされたイルザは、リックの安全を考えて駅に行くことをやめる。真相を知らないままカサブランカに逃れたリックは再び現れたイルザを問い詰めて真相を知り、最後は自分の通行証とウゲーテが持ってきた通行証を二人に渡してリスボンに逃すというベタベタなメロドラマになっている。映画の中盤でシュトラッサー少佐率いるドイツ軍将校が、リックの店でドイツの愛国歌「ラインの守り」を演奏させ全員で歌いはじめたところで、ラズロが演奏を止めさせて「ラ・マルセイユーズ」を演奏させる。すると、ドイツ軍に面従腹背を強いられていた全員が立ち上がって大合唱になる場面が感動的で、いつ観ても涙をこらえることができない。実際この場面の撮影現場では撮影スタッフが泣きながら撮影したという逸話が残っている。最後の場面では、リックがシュトラッサー少佐を殺害してイルザを飛行機に乗せるが、殺害場面に居合わせたルノー署長が見せる反骨精神と心意気を感じる場面で心の霧が晴れる。（1942年制作『カサブランカ』）

プレイボーイで知られる画家志望のニッキー（ケーリー・グラント）は滞在先のヨーロッパから婚約した富豪令嬢が待つニューヨークに大洋航路で向かう船の中で、婚約者のいるテリー（デボラ・カー）と知り合い恋に落ちる。船中でスナッフ写真を撮られて二人の関係が公になったことで二人はお互いの愛を確認し、今までの人生を清算して6ヵ月後の7月1日午後5時にエンパ

イア・ステート・ビルの展望台で会うことを約束して下船する。テリーは婚約者のケネスにすべてを話し、婚約を解消して歌手として活動を開始する。一方のニッキーも富豪令嬢との婚約を解消して画家として歩みはじめる。そして約束の7月1日展望台で待つニッキーのもとにテリーは現れなかった。待ち合わせ場所に着いたタクシーから降りたテリーは展望台を見上げていてタクシーにはねられ、下半身不随の状態になり、かつての婚約者ケネスのサポートを受けながら教会の合唱団の指導をする生活を始める。ニッキーは祖母が結婚相手のために用意してあったショールを羽織ったテリーの肖像を書いて画商に絶賛される。ニッキーは元婚約者ロイスに誘われたバレエ鑑賞会場で車椅子姿のテリーを見かける。クリスマスが近づいたある日、ニッキーは電話帳からテリーの居場所を見つけて、ソファーに座ったままのテリーと再会する。不注意で約束の日に展望台に行けなかったことを隠して、すべてを終わらせようとするが、帰りがけにテリーの寝室にニッキーが描いた絵がかかっているのを見てすべてを理解してハッピーエンド。全編を通して流れる「An affair to remember」はジーンと心に沁みわたる。(1957年制作『めぐり逢い』)

ジョバンナ(ソフィア・ローレン)とアントニオ(マルチェロ・マストロヤンニ)は海岸で会って恋に落ちる。アントニオのアフリカ戦線への出征を遅らせるために結婚式を挙げ、結婚休暇が終わるとき出征を回避するために、精神状態が不安定になったと精神病院に入院させるが、嘘が発覚してアントニオは過酷な対ソ連戦線に送られることになる。やがて戦争が終わり戦場から帰還してきた兵士からアントニオが雪の中で倒れていたと聞かされ、ジョバンナはアントニオの消息を訪ねて戦場のあった街に出かける。その街で行き倒れになり、記憶喪失になっていたアントニオを介抱し、子供二人をもうけたマーシャの存在を知る。マーシャからジョバンナの来訪を知らされたアントニオはイタリアに帰りジョバンナと再会するが、復縁することはなかった。ロシアに帰っていくアントニオをかつて出征を見送ったミラノ駅で見送るところで物語は終わる。全編に流れるヘンリー・マンシーニの「Sunflower」と、地平線まで果てしなく咲く撮影場所のウクライナのひまわり畑のラストシーンはいつ観ても泣いてしまう。(1970年制作『ひまわり』)

ロシアとウクライナの戦争は、本稿執筆時点で膠着状態が続いている。先日ウクライナに進軍したロシア兵に丸腰で近づいた老婆が、ロシア兵のポケットに無理やりひまわりの種をねじ込んで、「お前が死んでもこのひまわりがきれいに咲くよ」と叫んだ画像が配信され、途端にこの映画を思い出した。この老婆も1970年に上映された『ひまわり』を娘時代に観て涙したような気がする。

ひまわりはウクライナ、ロシア共通の国花である。